



滅びゆく武田氏とともに まさつね ～土屋昌恒の物語～



田野合戦

天正十年(1582)

長篠の戦いで敗れた武田勝頼が、体制を立て直すため、甲府から拠点を移したのは天正九年十二月のことでした。しかし翌年の一月末には、織田信長の支配する美濃との国境を守る木曾義昌が反旗をひるがえして織田と結ぶと、二月三日には信長は勝頼討伐を決定します。そして伊那・飛騨から織田軍、駿河から徳川軍、伊豆、相模、上野から北条軍の侵攻が始まります。すると信玄の娘を妻としている親族衆穴山梅雪(ばいせう)までもが徳川家康に寝返るなど、武田軍は目ぼしい抵抗もできないまま総崩れとなりました。勝頼は三月三日には完成したばかりの新府城を捨て、譜代(ふだい)の家臣小山田信茂(のぶしげ)の薦めた郡内の岩殿城を目指すこととなります。この時付き従う家臣はおよそ六百名でしたが、郡内へ向かう途中にも多くが離反し、さらに小山田信茂までもが裏切ったため、一行は笹子峠を越えることができずして死した。

三月十一日、勝頼一行は五千もの織田軍に現在の甲州市大和町田野に追い詰められます。数万の軍勢を動かしてきた武田家もこの時まで勝頼に従った武将はわずか四十人。その中には武田家の重臣で、南アルプス市徳永の長盛院の地に館を築いていた金丸筑前守(かねまるちくぜんのかみ)の3人の息子たちがいました。そのうちの一人、五男の土屋昌恒(まさつね)は、すでに勝敗が決している戦いの中で大軍を前に弓で奮戦し、最後まで勝頼を守り続けました。昌恒の働きは、戦後織田方からも賞賛され、「よき武者数多を射倒したのちに追腹を切つて果て、比類なき働きを残した」と『信長公記』に記されています。

信長の侵攻からわずか一カ月半、勝頼は自害し、昌

恒や他の兄弟も最後まで武田家と命運をともにしました(※2)。

天正十七年(1589)

徳川家康は鷹狩りの途上、静岡県清見寺を訪れました。そこで一人の子供と出会います。その子がお茶を出す姿に、家康は「尋常の者ならず、何者の子ぞ」と住職に問いました。住職が土屋昌恒の子と伝えるとあの忠臣昌恒の子かといたく納得し、家康が手柄を引き取ることになりました(※3)。この男児は後に土屋忠直と名のり徳川秀忠に仕え、その後千葉景久留里(くるり)藩主となり、子孫は全国に広がっていくことになりました。

現代

昌恒の墓が建立された長盛院の秋山住職によれば、今でも静岡や茨城をはじめ全国各地から土屋氏の子孫の方々が昌恒公について学ぶ学生が来られ、お参りをされることとです。栄枯盛衰は世の習いですが、身命を賭して主君に尽くした人の物語は、縁となつて今もなお語り継がれているのです。

文/写真 文化財課



上段:長盛院(右)と土塁(左)。下段:秋山昌人住職(右)、昭和40年代以前の土屋昌恒の墓(左)。長盛院の境内はもともと武田家の重臣金丸氏が館を築いた地で、現在も西側を守る土塁と堀跡が残る。境内崖下には金丸家、土屋家の墓地がある。館は武田家滅亡時織田軍に焼き討ちされ消失。跡地に延宝五年(1677)長盛院が移設された。

あんな人も!
驚きがいっぱい

真田昌幸も
荊沢付近に
住んでいた!

伊能忠敬も
やって来た

東山魁夷の
手紙初公開!

ふるさと文化伝承館エントランス展

南アルプス市を訪れた人々～風土をはぐくんだ風～

夢窓国師、真田昌幸、伊能忠敬、石橋湛山、東山魁夷、大岡實など

布教、戦、勉学、疎開、測量、文化財保護などさまざまな目的で市内を訪れた人々の足跡をたどります。

開催期間 5月11日まで

開館時間 9時30分～16時30分 木曜休館 TEL.282-7408

※2 市内の武将で田野合戦まで勝頼に付き従った武将に跡部勝資がいる。

※3 『藩翰譜(はんかんばん)』より

※1 土屋惣蔵とも呼ばれる。田野合戦にて片手で多くの敵を斬り倒した「片手千人斬り」の伝説が後に創られた。